

## I 音楽科で目指す「自ら判断・行動し、未来の創り手となる個の育成」

歌唱や器楽において、他者と「合わせて」歌ったり演奏したりする技能を身につけることが指導事項にも位置づけられている音楽科において、集団での学習展開や技能習得に重点が置かれ、「個」の学びの過程が見えにくくなっていることは、従前からの大きな課題である。創作においても同様に、記譜力・読譜力・演奏技能不足等の理由から、グループで1曲を創作する活動が推奨されることがある。また、鑑賞においては、ある生徒の音や音楽の捉え方や主観的イメージが全員の知覚・感受であるかのように錯覚される学習場面さえある。これらに共通する問題は、生徒一人一人がどのような見方・考え方を働かせたのか、どのような資質・能力が身についたのか、何を学んだかを、教師も生徒自身も適切に捉えられていない点にあると考える。

この問題を解決するため、前次研究「自己を拓き、協創する生徒の育成」においても、生徒一人一人の音楽的な思考に重点を置き、研究を進めてきた。その成果は、生徒自身が自分の学びや身につけた知識・技能を、次の学習へと生かそうとする態度であり、教科で培った「見方・考え方」や、自分の得た活性化された知識を“道具”として持ち歩き、その先の学習に活かそうとする姿であると考えている。

しかし、実際の授業では、自分の知覚・感受に自信がもてず表出できないという点や、学習過程に「わからない」「できない」が含まれている時に、解決に向けて自ら考えよう・表現しようとせず、教師や他者の提案を待っていることがある点など、全員が自ら判断・行動しているとは言い切れない場面がある。生徒からは、これまでに学習した方法で表現してみようと試行錯誤したり、他者に意見やアイディアを求めたりするなど、自ら率先して行動する姿を引き出したい。また、教師側は、授業中に発言できないことを単純に「個が弱い」と捉えるのではなく、生徒個々の思考過程や成長の様子を様々な方法で表出させ、見取れるような工夫が必要である。前次研究までの成果を活かし、手立てに工夫と改善を加えながら、「自ら判断・行動し、未来の創り手となる個」を育成するため、今次研究を進めていきたい。

## II 音楽科における研究目標1の実現に向けた取組

研究目標1：特に授業を通して個を育むことを目指して、生徒が主体性を發揮して課題解決に向かう授業のあり方を考え、実践する。

音楽科では、以下の三点を重点とし、授業実践を行う。

一点目は、「音や音楽についての思考を複眼的に働かせることを意識した授業構成の工夫」である。これまでの研究においては、「作曲者」「鑑賞者」「演奏者」の3つの立場を意識しながら生徒個人が音や音楽と関わることで思考を深めたり、意見を交流しコミュニケーションを充実させたりすることに重点を置いていた。具体的には、創作の授業で自分が創作した作品を演奏して仲間に聴かせるのではなく、互いの作品を演奏することで、「作曲者」は自身の曲の「鑑賞者」へと視点を変化させて新たなアイディアを生むことができたり、「演奏者」として作品と関わることで仲間の作品を“自分事”として捉えることができたりする効果があった。このように一つの作品に複数の視点で関わったり、創作の授業で「作曲者」として働かせた音楽的な見方・考え方を鑑賞の授業に活かすなど、同じ視点で複数の曲と関わったりすることで、「表現」領域と「鑑賞」領域の関連を図ることができ、生徒の音楽の学びが深ま

る。今回の研究においても、「主体性」を発揮して課題解決に向かうための手立てア【学習課題】イ【課題追究】エ【協働性】という点でやはり有効であると考える。

二点目は、「個の表現に対する思いや意図、音楽によって喚起されたイメージや感情を大切にした授業展開の工夫」である。教師や一部の生徒の考えのみに基づいて、その教材曲の出来栄えをよくするための練習になるような授業や、



手法を限定して似たような作品を全員が創作する授業、音楽的な要素だけを聴き取る授業では、生徒が「主体性」を発揮するのは難しいだろう。歌唱や器楽においては、特に合わせて歌ったり演奏したりする学習において、生徒一人一人がどのように表現したいのかという思いや意図をもち、伝え合うことを大切にしたい。創作においては、「音のつながり方を試したい」「創意工夫してオリジナリティを出したい」と生徒が思えるような課題や条件の設定に留意する。鑑賞では、音や音楽と出会ったときの印象を自由に交流したり、自己のイメージや感情についてカードやシールを用いて簡単に表出できるようにしたりするなど、生徒の聴き方の多様性を保障する。また、記譜力・読譜力・演奏技能不足を補い、音や音楽に対する思考を深めるためにタブレット型端末を活用するなど、教材・教具も工夫したい。これらは、「主体性」を発揮して課題解決に向かうための手立てア【学習課題】イ【課題追究】ウ【支援】に関わるものと考えている。

三点目は、「学習内容を既存の知識や音楽経験と結びつけ、自己評価しながら学び進めることを意識した授業展開の工夫」である。生徒は、日常的に様々な音楽媒体を通してたくさんの音楽と関わっており、自然音や環境音にいたるまで、すでに多種多様な音楽経験をもっている。また、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を目指すことが音楽科の目標であることから、音楽科の学習が、その後の学習や生活とどのように関わり、どのような意味や価値をもつのかといったことに生徒が意識を向けることが必要だと言われている。奈須（2017）が、「自分が所有する知識との適切な関連付けにより、子供は意味を感じながら主体的・対話的に、そして着実に深い概念的理解へとたどり付くことができる」と述べていることからも、生徒が既にもっている知識や音楽経験を学習に活かすことや指導の過程にその場面を位置づけることは、音楽科の学びを深めることにつながると考える。

具体的な方法の一つとして、全ての題材において使用している「振り返りシート」を用いる。これまでの実践から、授業の終末では本時の学習内容を振り返りながら次時の見通しをもつこと、次の授業の冒頭では前時の学びを思い出し本時の目標をもつことについて効果的であることが明らかになった。これらは、「主体性」を発揮して課題解決に向かうための手立てオ【振り返り】とア【学習課題】にあたる。習慣となっている「振り返りシート」の取り組みを利用して、自分の学習過程を自分で把握し、能動的に課題解決に取り組む思考も習慣として獲得するように促せないかと考えた。「強弱記号の意味がわかった」という結果だけではなく、「クレッシェンドをつけて演奏すると、盛り上がりや気持ちの高まりを表現できることがわかった」「クレッシェンドをかけ始めるところがばらばらでそろわなかつたので、次回はタイミングを学級全体で合わせたい」のように、知覚と感受を結びつけながら、学習過程に目を向け思考の状態を具体的に記述することが必要である。また、題材の冒頭で教材曲と出会ったときに記述した第一印象と、各授業の振り返りを見比べながら、自分の学習過程を把握したり、学びの深まりを実感したりできるのではないかと考える。そのために、客観的な視点を設けてシートに記述するよう促したり、記述されたことにコメントを行ったりすることで、生徒の思考の状態やつまづきを見取り、目標を達成するために行動を修正していくようなウ【支援】を行う。

### III 実践例

第3学年 歌詞と旋律を味わいながら表現を工夫しよう 「A表現」 (1) 歌唱

教材：武島羽衣／滝廉太郎「花」

#### 1 題材の価値と構成

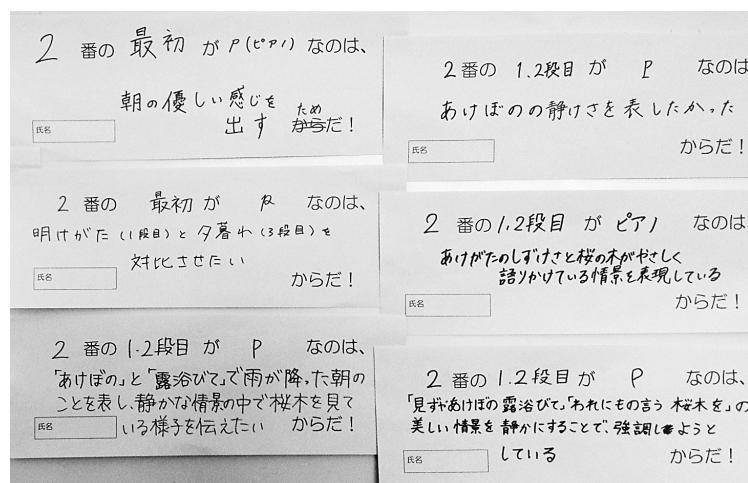
「花」は、組歌「四季」の第1曲で、春の隅田川の情景を優美に表した楽曲である。我が国で長く歌われ親しまれているものであると同時に、日本語の持つ美しさや日本の自然や四季の美しさを感じ取ることができる作品である。1・2・3番とも二部形式ながら、それぞれの歌詞と旋律に特徴があり変化を重ねている構成のため、これまでの学習や音楽経験を活かして幅広い解釈や表現が可能であると考えた。

時	学習活動	3つの立場
1	○「花」を聴いた印象・歌った印象を交流する ○歌詞の意味や調子を確認する	鑑賞者・演奏者 ※作詞者
2	○1～3番の旋律が異なることから、作曲者はなぜ旋律に変化を加えたかを、 楽譜や歌詞を根拠に考える	作曲者
3	○前時の学習内容をもとに「歌い方ガイド」を作成する ○作成した「歌い方ガイド」をもとに、表現を工夫して歌う	作曲者→演奏者
4	○前時の学習で、工夫した表現を発表し合う	演奏者と鑑賞者 の交流

#### 2 研究目標1の実現に向けた取組と、授業の実際

「音や音楽についての思考を複眼的に働かせることを意識した授業構成の工夫」として、上の表に示したように、3つの視点を行き来し、複眼的な思考を促しながら学習を展開した。特に、歌唱の題材に「作曲者」の視点を盛り込むことで、創作や鑑賞で学習したことや経験した思考を活かし、楽曲を「演奏者」とは異なる視点で捉えることをねらった。

「個の表現に対する思いや意図、音楽によって喚起されたイメージや感情を大切にした授業展開の工夫」として、第2時では「解釈カード」を用いて楽譜に貼り付けながら交流した。まず、旋律（リズムを含む）・強弱・その他の要素（速度等）について1番・2番・3番の違いを確認し、それぞれに「作曲者」のどのような思いや意図があるのかを考えカードに記入した。右の写真は、2番の冒頭の強弱がpで始まることについて考えたものである。カードを見比べることで、



〔写真〕2番の解釈カード

「歌詞と旋律から感じた朝の情景が少しずつ違うことが面白い」「自分は歌詞のことしか考えていないかったが、fで表される夕暮れとの対比だというカードに驚いた」というように、自分とは異なる解釈に出会い、旋律の違いに新たな意味を付け加えていた。このように「作曲者」の視点から旋律の工夫に自分なりの意味を見出すことで、1～3番の旋律の変化が“ややこしいもの”ではなく“意味のある工夫”と捉え方が変化し、表現の創意工夫へつなぐことができたと考える。

第3時では、第2時の学習内容を整理し、「作曲者」の思考と「演奏者」の思考をつなげて表現の創意工夫へ活かすため、「歌い方ガイド」を作成した。右は、3番の「歌い方ガイド」である。この生徒は、第2時で交流した仲間の「解釈カード」を組み合わせ、○で囲んだ部分が伏線となり、3段目のfを引き立たせる効果を生んでいることをガイドで示しており、3番全体の構成をつかむことができている。また、「気持ちの高ぶり」や「フィナーレ感」を出すために、「作曲者」がどのような工夫をし、自分は「演奏者」としてどのように歌うとよいかをつなげて記述することができている。まとめには、強弱をつけて表現することや音の長さを保つことが自分なりに意味付けられている。これらは、全員でそれぞれの箇所について確認しながら解釈したり意味付けたりしたものではなく、生徒自身が「主体性」を發揮して「楽譜から発見したこと」「たくさんの情報の中から選んだこと」を表現の創意工夫へつなげ、見出したものであることから、前述の手立てにより、音楽の学びを深めることができたのではないかと考える。

[写真] 3番の歌い方ガイド

## IV 授業実践を通して見えてきたこと

教師側の成果として、「個」の学びの過程をたどり、丁寧に見取りながら授業展開を工夫することができた。そのため、教師の授業のねらいと生徒の学びに齟齬が生まれる場面や、読譜力・演奏技能不足等の要因により思考が行き詰まる箇所が明確になり、展開を修正したり、内容に補足を加えたりしながら学習を進めることができた。生徒側の成果として、それぞれの授業や題材で学びがどのように深まったか、まだ何がわからないのか、できていないのかを捉えることができ、次に活かそうとする姿が見られた。しかし、まわりの生徒や教師が「fの声の響きがよかった」と言っても、本人は明確な根拠がないまま否定的な自己評価をする場面もあり、授業実践によって「個」を育むことができたとは言い切れない。今後は、生徒の学ぶ姿とともに、生徒の自己評価に着目し、研究を進めていきたい。

## V 参考文献

- ・ 荏谷剛彦『知的複眼思考法』講談社、1996
- ・ 中川恵正研究室・富田英司『児童・生徒のためのモニタリング自己評価法』ナカニシヤ出版、2015
- ・ 奈須正裕『資質・能力と学びのメカニズム』東洋館出版社、2017
- ・ 北海道教育大学附属札幌中学校研究紀要第64集、2018